

飛耳長目

通巻197号 令和2年4月1日発行

昭和30年1月30日発行「開頭」第85号一月号
巻頭言

1955年の年頭に題す

〈悲願観余すところ十八年〉

森信三

1 1955年という今年は、我等の民族にとつて、さらにまた全人類にとつても実に重大な年だと思ふ。その教えは、今年はその凄惨（せいさん）極まりなかつた第二次世界大戦満十年に該当する。すなわち全人類にとつて恐らくは最後の大战となるであろうし、またそうなければならぬ。あの第二次世界大戦後、九十年目に当たるのであつて、これを直接我等の上に見るも、あの敗戦直後の混乱期には、民族の前途如何に成り行くかと、一日として安きはなかつたが、十年の歳月が経過した今日では、兎にも角にも一応の落ち着きを見るに至つてゐる。これを国際関係に見るも、十年前には全く同一歩調を保つていた米ソ両国は、その後数年を出でずして、世界を二分して相対立するに至り、一時は一触即発の危機さえ憂えられたが、今日では、「資本主義と共産主義との共存の可能」が唱えられ出して小康を得るに至つてゐる。同時に我等の民族にとつては、今年が半ば名目的ながらも独立後三年に該当する今年でもあつて、

あらゆる意味において、自立の第一歩の始まるべき年と言つて良い。そもそも歴史は古来百年を以て大變し、三十年を以て中變し、十年を以て小變すると言われている。これによつて考えれば、我らは今年三十年の前途を遠望しつつ、さし当たり今後十年間の具体的進路を考えねばならぬ年である。大戦後の混乱もようやく収まるとともに、国の歩みいよいよ重大さを加えつつある秋（とき）、われら国民教育者としては、その悲願たる「国民教育定礎」の大業に向かつて、一躍前進すべきを祈念する外ない。

日本民族の使命

森信三

1 第二次世界大戦において、未曾有の敗戦を痛験し、一時はこのまま再起も不可能で、滅亡するのではないかとまで思われた我等の民族も、極陰は陽に転ずるの易理（えきり）の理（ことわり）によつて、十年の歳月が経てば、おのずと「民族の使命」について、考えずにはいられなくなる今日この頃である。げに「時」こそは、何物にもまさつた偉大なる力の保持者である。

だが、ここに「民族の使命」について、考えねばならぬと言へば、一部の人は、「又ぞろそのような事を言い出して……」と眉をひそめる向きも必ずしも絶無ではないかも知

れぬ。そうした人々の言うことが分からぬわけではない。しかし一個の民族は、それが自滅し滅亡すれば、いやしくも、この地上にその存在を維持する以上、自らの使命が、いずこにあるかについては、常にこれを明確に把握している必要がある。否それは必要という程度の生温い表現ですまされることではなく、まさしくその義務ありと言うべきである。

何となれば、一個の民族にとつて、その使命とは、言い換えれば、その存在理由というべきであつて、これが不明確ないしは無いとしたならば、その民族は、地上に存在する意味はなくなつたわけである。我らは、なるほど第二次世界大戦において、大敗をしはした。しかしながらその事が、直ちに民族の滅亡を意味するものでなかつたことは、爾来十年の今日に至つて、不十分ながらも、ようやく民族として、自己を取り戻しかけたと言つてよい現状のうちに見られる。

もちろん斯くは言つても、民族の現状は決して満足すべきものでないことは、言うまでもない。パチンコ、ヒロポン、青少年の性的犯罪等々、亡国的と称すべき現象は至る所に見られる。だが、それにも拘わらず大望する時、戦後十年を経過した昨今、我等の民族にも、早春の野のように、一見しては一面の枯れ草の野の如くではあるが、しかも地表

にはすでに幽(かす)かなる草の芽のあちこちに芽生えつつあることが感じられる。もちろん今のところ、極めて幽かではある。だが、やがてそれらが生い育つべき運命をもつべきことを私は疑わない。

2

民族の使命の問題について、何人にも勝つて、思惟(しい)しなければならぬのは、我々教育者であると思う。特に国民教育者であると思う。何となれば、この問題がはつきりとつかめていない限り、真の国民教育は不可能だからである。けだしそれは、行くべき方向を持たない汽車汽船のようなもので、真の前進の可能であるはずがない。有限の儂き生命をもつた一個人の場合でさえ、これは当てはまる真理である。まして況んや一個の民族の場合においておやである。

私は今日国民教育の振るわない最深の原因は、畢竟(ひつきよう)この点に基因すると思惟する者である。すなわち過ぐる敗戦の痛打によつて、我らの民族は、それまで内に抱き外に向かつて高らかに掲げ来たつた、「民族の使命」の標識を一挙にして叩き落とされてしまつて、現在に至るまで、未だこれに代わるべき新たな使命の標識を見出しかねているが故に他ならない。少なくとも私にとつては、戦後十年の永きにわたる間における国民教育の不振の根本的因由は、最深の根をこ

こに持つとしか考えられないのである。而してまたこれほど当然な事はないというべきであろう。一個の民族が何処へ向かつて進むべきかが分からずにいて、どうして次の世代の若き生命にその進路の種まきをすることができらるであろう。が、それにしても、どうして我等の民族は、今日までこの重大な問題について、これを問題として取り上げなかつたのであろうか。人々のうちには不思議に思う向きもあるかと思うが、しかしこの点については私は、決してそれを不思議とは思わない。なるほど十年の歳月は必ずしも短くはない。とくに現在のうちに時代が激しく動き流つたつある場合には。だがそれすらも、我らの民族が、過ぐる第二次大戦において破れた瘡痕(そうい)の深大さに比べれば、必ずしも長きに過ぎるとは言えぬであろう。あの敗戦は、我らにとつて文字通り未曾有のものであつた。さすれば無条件降伏下に打ち倒された我等の民族が、十年間立ち上がりえないで、自らの果たすべき使命感についても、これを亡失していたとしても、必ずしも怪しむに足りないことと思われる。確かに過ぐる敗戦は、我等にとつてそこまでの深き痛打を与えたものであつたと私は思う。だが戦後十年を経過した今日、我等は再び立ち上がらなければならぬ。正確には未だ立ち上がるとまでは言えないにしても、少なくとも「正眼」に自己の前途を照見しなければならぬ段階には達した

と思う。否今日この一事を為し得ないとしたならば、我等の前途は、ほとんど正道に立ち還り得る日はないとも言えるであろう。少なくとも私には、現在その様に思われてならないのである。

3

では端的に言つて、我々日本民族の使命は如何なるところにあるのであろうか。との問いに対して、何よりもまず私の脳裏に浮かぶものは、明治維新後、民族の生める最大の予言者内村鑑三先生が、その名著「地人論」中に道破していられる見解である。先生曰く、「日本国の天職如何、それは東西両洋間の媒介者たるにあり」と。すなわち先生によれば、我らの民族は、地理的にも、歴史的にも、「亜欧の両主義を同化し得る特質がある」というのである。

しかしながらこのような見解は、ひとり内村先生のみの特売ではない。我が民族の生める英雄的天才児一人たる岡倉天心もまた同様の見解を披瀝していることは周知の事柄である。否このような見解は、これらの天才的思想家のみではなく、多少なりとも教養を持つほどの日本人ならば程度の差こそあれ、何れも等しく抱懐している見解と言つてよいであろう。そうしてそれには、前述したように、我等の民族のおかれている地理的地位と、その歴史的現実とがこれを確証しつつあるわけ

であつて、「東西文明の融合」とか「東西文化の統一」などという標語は、戦前それこそ耳にタコのできるほど、見もし聞きもしたものである。そこで今や新たな問題は、このような戦前の考え方が、未曾有の敗戦を喫した我々にとって、今日再びそのまま当てはまるか否かという問題である。この問題こそは今日、われらの民族が、最も真摯に検討を要する重大問題であるというべきであらう。

4

問題の便宜上、まず最初に結論を言つておこう。端的に言つて、戦前我らの考えていたような「東西文化の融合ないし統一」論は、今日そのままではもはや通用しなと言わねばならぬ。このことは、何よりも敗戦そのものが、最も深刻かつ明白にこれを事実の上に証明していることによつて、明らかである。では我等には「日本民族の使命」として、東西文明の融合ないしそれへの媒介的役割ということは、永久に我等より消失したと見るべきであらうか。断じて否である。

では如上の矛盾をわれわれは今日これを如何様に解くべきであらうか。そもそもあのよくな大敗を喰つた我等の民族に、依然として「東西文化の融合ないしそれへの媒介者」的役割を果たし得る力があると言ひ得るであらうか。ある意味では全く身の程知らずのおこがましいこととも言えるであら

う。だがそれに対して、今端的に私の考えを述べるとすれば、むしろ過半の敗戦こそは、神天が我等の民族にこの大使命を果たさしめんが為に、与えられた一大試練であると言ひべきではないだらうか。では何故にそうなのか。

そもそも東西文明と西洋の文明とは、すでに幾多の人々が明らかにしているように、根本的にその質を異にする文明である。従つてこれが融合統一というが如きは決して容易の業ではない。否その真の完成は、人類の全歴史の行程を必要とするともいふべきであらう。従つて我らの民族に許されることも。内村先生が妙しく言われたように単に、その媒介的役割たるに過ぎまい。だがそのような媒介的役割すらもが、しばしば述べるように、地理的歴史的條件を絶対必須とするのであつて、その点からしても、地球上、我らの民族の右に出ざる民族のありえないことは、未曾有の敗戦を痛験した現在といえども変わりはない。

否正眼にしてこれを見れば、あのよくな大敗戦を痛験したればこそ我らの民族は初めてここに如上神天の意思し給う人類的な使命に向かつて今や真実の一步を踏み出し得ると思ふのである。それはちょうど水素と酸素という全く異質的な両元素が合して水となるためには、一大轟音を発してその化合が可能なのと相似たものがある。

げにこの場合轟音は、かの大敗戦に似ているとも言えよう。それのもつ内面的意義はいかなるものであろうか。一言にしてそれは民族同体の徹底的な自己否定の経験であると思ふ。ちよūd酸素と水素とが合して水となるためには、両者はともに自己たることを捨離しなければならぬと同様である。でなければ水となることはできないのである。

同様に我等の民族が、真に神天の課し給える大使命を果遂しえんがためには、我らの民族は一度徹底的に打ち砕かれなければならなかったのである。すなわちわれわれには、一度自らこれをこれまで誇り来たつたもの一切を捨てねばならなかったのである。でなければ、我々にとりて、全く異質的な西洋文明を撰取して、東西両文明の真の媒介者たることはできないわけである。

宜なるかな、我々の民族の西洋文化に対する真の「開眼」は今日の敗戦によって初めて真の第一歩が踏み出されたといふべきであらう。それまでの西洋文化の撰取というは、今にして思えば、単に皮相の模写でしかなかったのである。そしてこのことを通身徹骨（つうしんてつこつ）知らしめたところに、今自敗戦の意味があるといつてよいであらう。

かくして我らの民族の今後の歩みは、何よりも西洋文化を、改めて民族の躰（からだ）

を通して撰取し直すということであらう。このような態度を民族全体として確立することこそ、今日最大急務といつてよいであらう。

而してここに民族の躰を通してということのためには、一面からは西洋文化の撰取が、これまでのように一部のインテリ階級にのみ限られないで、一般国民とくに庶民階層の人々のうちに、生活的に浸透することを期すべきであり、今のひとつは、それへの最根本方途としての教育、特に国民教育の根本的な改革を必要とするのであらう。

而（しこう）して後者については、教育を単に文字の上での「生活」ではなくて、根を現実の子供らの生活自体の中に下ろさしむべく努力することであらう。戦後「生活教育」の語は教育界に喧しいが、しかしそこにはなお学者先生達の概念を全脱せぬ恨みが多い。真の教育は被教育者自身、これを受けることによって、力と喜びとを得るものでなければならぬ。知らず、今日このような教育が果たしてどの程度に行われていると言えるであらうか。

重ねて言う。我らの民族は今自の敗戦を通過することによって、初めて神天の付託たる東西文明の媒介者たる第一歩に起つを得たのである。而してその現実の踏みだしは、西洋文化を庶民生活の中に具体化することから始めなければならぬ。随つてそこにはある意味では明治の初年に、福沢諭吉の演じたよう

な偉大なる啓蒙を……第二の啓蒙を必要とするとも言えるであらう。同時にそれと相即して、国民教育においても、西洋文化を生徒の生活の中に融化せしめんがための新たな努力が開始せられなければならぬのであらう。而してこれら二つの相即する大業のための先決条件となるものは、民族自立のバックボーンの確立にあることは言うまでもないが、この重大問題については、いざれ項を改めて説くことにしたいと思ふ。

あとがきに替えて

一校再建問題で森信三先生が囁んで含めるように、「実践」の意味とその深さ、大事さを説かれて余りある。ではどんな実践かというに、示されているように、一校主宰たる校長の人間としての凡てを引つ張り出してぶつつけよ！と言われる。そこにこれがという具体的なモノはなく、十色の展開が予想される。愚生もまったく賛成であつて、そこに文部省の学習指導要領など参考程度でよからうと思ふ。西先生についての森信三先生の思い入れは、簡単に憶測で意見感想などというのは危険だ。余人の知り得ぬ高さと深さがある。（29日二繁）

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話 0744-4513422

Email: h33@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn

二繁